

仕事と女らしさのバランス

Balance Between Work and Femininity

大島まり Mari OSHIMA

「女らしさ」ってなんなのでしょう。私自身、はっきりと「これだ!」と定義できるわけではないが、どちらかというネガティブなイメージをもっていた。とくに、研究や仕事をしていくうえでは、そのような要素は極力排除していかないといけないと思っていたし、いまでもその傾向にある。「こんなこと言ったら、だから女は、って思われるかな。。。」などと心配し、とくに仕事の時には話す言葉も選び、すごく気を使う。そのくせ、「オオシマ、おまえ、そんなこと言っただけで、おやじだなあー」と言われると、妙に腹立たしかったりする。自分が女であることは変えることはできないし、どうしたもんだと、悩むことが結構ある。

しかし、つい最近になって、考え方や見方が随分変わってきて、悩んだところではなくなっているように思えるようになってきた。この心境の変化は、女性研究者が増えてきたことと、子どもをもったことの二つによると思う。

私は、大学卒業時は雇用均等法前であり、修士在学中に雇用均等法が始まったという端境期の世代である。大学では工学部に進学したが、クラスでたった一人の女子学生。大学院でも一人、しかも次に入ってきた女子学生は三年後。その後、助手として勤務したが、機械工学科という分野のせい、職場でもひとり、学会に行ってもひとりという状態が続いた。その当時を振り返ると、女だからと特別視されなくなかったのか、妙に肩肘をはっていたように思う。かわいいものを見ても、「かわいい!」と素直にいうこともできず、正直言ってかわいくなかった。それから、ぼつぼつとしかいなかった工学部の女子学生が、少しずつ毎年増えてきた。そして、彼女らが社会に出て働き、出産などのライフ・イベントを経験しながらも研究を続けて

いる。いままで点の存在でしかなかった女性研究者が、細い線となり、そして、その線が段々と太くなってきている。しかも、ただ太くなってきているだけでなく、元気に周りを活性化している。もちろん、先輩方から学ぶことも多いが、若い彼女たちを見ていると、すごくいきいきとしているのである。そして、髪を振り乱して研究一筋という感じもせず、非常におしゃれであり、かわいいものを自然体で「かわいい!」と素直に喜んでいる。もちろん、女らしさと仕事のバランスに悩むことはあろうが、彼女たちの姿を見ていると、逆に肩肘をはらずに自然体でいることが、周りにとっても一番良いということを感じたように思う。

そして、私の娘。保育園に通っている子どもをみると、やはり生まれ持った人格があり、そして体格そして行動パターンは赤ん坊のときから男女差があるのだと、改めて認識した。やはり、女性は男性になれないし、反対に男性は女性になれないのである。研究という仕事において、ジェンダーの違いがキャリアに与える影響は長い目でみれば、大差はない。その意味から言うと、別に男性のように振舞う必要はないのである。男女にかかわらず参考になる人々を見つけて、有用な点を学びとり、自分にあったスタイルになるように身につけてスキルアップしていくのが一番なのは、と当たり前なことであるが、やっと思えるようになってきた。

仕事と女らしさのバランス。すこし解答が見えてきたように思うが、でもやはり私にとって永遠のテーマ。悩みながら、これからも、先輩だけでなく、後輩からも学び、自分にあったバランスを見つけていくことだろう。



大島まり Mari OSHIMA

東京大学大学院情報学環・生産技術研究所
教授、博士(工学)

1992年東京大学大学院工学系研究科原子力専攻博士課程修了
専門はバイオ・マイクロ流体工学
E-mail: marie@iis.u-tokyo.ac.jp